

聖体に育まれた殉教者たち 島原・雲仙の殉教者



文：古巣 馨神父
(長崎教区)

セミナリオ、コレジオ、そして信徒活動の組の養成、かつて島原半島はさながら日本の教会の「ガリラヤ」のようでした。やがて来る殉教時代、その育まれた信者たちの信仰は鮮やかに証されています。

一六一三年十月七日、有馬での八人の殉教を契機に島原半島の教会は、血による信仰の証の時代に入ります。この事件の直後、領主有馬直純は延岡（宮崎）へ転封、その時、キリシタン武士の多くは主君に従わず、身分や禄を捨て有馬に残ります。信仰の道を選んだのです。

三年後、徳川幕府が有馬領主として派遣したのが松倉重政でした。松倉はそれまでの有馬ではなく、島原に城を構えます。延べ百万人が築城のために徴用されたと言います。酷税と重労働、司祭の追放と強化されるキリシタン弾圧、この機運が島原の乱へと発展していくのです。

当初、松倉は築城や人心掌握のために、キリシタン黙認の姿勢を保っていました。しかし、一六二七年一月、江戸から帰った松倉の人格は変わっていました。幕府はキリシタンを黙認する松倉を厳しく責めたのです。こうして島原近郊にいた主だった信者三十七人が捕らえられ城内に投獄されました。二月二十一日の朝、そのうちの十六人に死刑の命が下されました。

島原地区の世話役パウロ内堀作右衛門の三人の息子、バルタザル、アントニオ（十八歳）、イグナチオ（五歳）もその中にいま

した。十六人はまず城の中庭で両手の指の真ん中三本を切り落とすという、拷問を受けます。最初に呼び出されたのが二男のアントニオ、次に長男のバルタザル、一番最後が五歳のイグナチオでした。イグナチオは小さな指を切り落とされたとき、まるで「美しいバラの花を見る人のように」ゆっくり血の流れる手のひらを自分の目の前にかざしたと、報告書は伝えていきます。

その後、十六人は裸にされ二艘の小船に乗せられると、有明海に連れ出されます。松倉は息子たちの死を見届けさせるために、作右衛門を別の小船に乗せています。二月ともなれば、有明海にも雪が舞います。裸で、手足を後ろ手に縛られ、沈めては引き上げる拷問を繰り返したあと、最後は石をつけて沈める。「お父さん、こんな大きな恵みを神に感謝しましょう」。これは二男アントニオの最期の言葉です。バルタザル、イグナチオもその後には続きました。わが子に信仰を伝えた父と、その父の信仰を励まし、感謝（エウカリスチア）を口にする子の姿は、現代の親子のあり方を問いかけてきます。

「わたしたちは、息子たちを見つめる作右衛門の姿に、あのいけにえを捧げるときのアブラハムを思い出しました」。その場で目撃したヨアキム峰の言葉です。

子どもたちの殉教から一週間後、額には切支丹の焼印が押され、「この輩はキリシタンゆえに罰せられる。宿を与えてはならぬ」と書かれた着物を着せられた内堀作右衛門

右：雲仙殉教の碑
 中：「キリシタン殉教」のステンドグラス
 （カトリック島原教会）
 左：パウロ内堀の署名が入った奉答文
 （カトリック島原教会蔵）



島原・雲仙の殉教者（29人）長崎教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
バルタザル内堀	1627.2.21	島原	
アントニオ内堀	"	"	18
イグナチオ内堀	"	"	5
パウロ内堀作右衛門	1627.2.28	雲仙	47
ガスパル喜左衛門	"	"	
マリア峰	"	"	
ガスパル長井宗半	"	"	
ルイス(ルドビコ)信三郎	"	"	
ディオニジオ佐伯てんか	"	"	
ルイス(ルドビコ)佐伯きぞう	"	"	
ダミアン市弥太	"	"	
レオ中山そうかん	"	"	
パウロ中山	"	"	
ヨハネ木崎	"	"	
ヨハネ平作	"	"	
トマス新五郎	"	"	52
アレクシス庄八	"	"	
トマス近藤兵右衛門	"	"	63
ヨハネ荒木勘七	"	"	34
ヨアキム峰助太夫	1627.5.17	"	60
パウロ西田休巴	"	"	74
マリア	"	"	36
ヨハネ松竹庄三郎	"	"	38
バルトロメオ馬場半右衛門	"	"	53
ルイス(ルドビコ)助右衛門	"	"	37
パウロ鬼塚孫右衛門	"	"	64
ルイス(ルドビコ)林田宗可	"	"	67
マグダレナ林田	"	"	68
パウロ林田茂兵衛	"	"	35

ら十六人が雲仙岳で殉教します。神の子の消えない印を刻み、キリストを着た人たちの辿った道は、今も鮮やかです。
 五月十七日、まだ牢内に残されていたヨアキム峰ら十人も雲仙岳に向かいます。組頭や庄屋をしていた彼らは、残された親指と小指に筆を持ち、命じられるままに財産目録を書き上げての出立でした。

に、雲仙岳の殉教は役人以外に誰も立ち会った人はいませんでした。その殉教者のほとんどが、半島内の教会の世話役たちでした。彼ら選ばれたときから、最期まで自分を捨て、仲間のために徹底的に仕立ててきたのです。生身の人間が、心底仕える人に変えられた理由を、彼らは最後の祈りで表わしています。

「いとも尊き聖体は、賛美されますように」主の過ぎ越しに与ったとき、人はキリストに似た者へと変えられていくのでしょうか。

無償による慈悲の心

西坂の殉教者・ミカエル薬屋
ニコラオ福永ケイアン



取材協力
レンゾ・デ・ルカ
(イエズス会)

1583年、社会福祉的なミゼリコルディア（慈悲）の組が長崎で組織され、その本部が興善町に置かれます。この組は社会から見捨てられた病人に薬を持って行ったり、病気を癒したり、彼らのために祈ったり、亡くなった時には遺体の埋葬を手伝ったりしました。特に長崎は貿易港ということもあり、外国から薬や漢方薬などを手に入れては、病に苦しむ人たちの治療にあたりました。その当時、刀傷を負った人が多く、放置すると化膿してしまいました。その中でも、鉄砲の弾は鉛製で非常に軟らかく、体内に残ると死の危険さえありました。日本では弾を取り出す手術は施されておらず、彼らは外国の宣教師たちから摘出方法を教わっていました。こうした治療により、数多くの人の命が助かります。しかも兄弟愛、慈悲の心、無償で治療にあたることもありました。

ミゼリコルディアの組が発展していく前には、各地に大きな教会がありました。ところが1614年の禁教令に伴い、ほとんどの教会が破壊されていきます。そうした迫害の中で、この組だけは1620年代まで残ります。幕府はこの組の人たちを殺せば、病人や困った人たちを世話する人がい

なくなることで、戦争や病気で亡くなった人を埋葬してくれる人がいなくなることを恐れてこの組を残していきました。やがて幕府は、この組の人たちを残しておけば、いつまでもキリシタンたちがなくならないことに気づき、組織の壊滅を図っていききました。

この組の会長を務めていたのがミカエル薬屋です。彼は長崎の興善町の住民ですが、出身地は分かりません。少なくとも1618年からミゼリコルディアの組の会長を務めていました。治療を施す薬、霊的な癒しの意味をも込めて彼は「薬屋」と呼ばれたのでしよう。敵意に満ちた社会の中で、追放、投獄、拷問を受けますが、ミカエルはじつと耐えて善業を行っていました。この慈悲の行為は迫害者に対するミカエルの答えであり、ミカエルに対するイエスの答えでもありました。「わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」（マタイ25・35〜36）のことばを誠心誠意実行していました。彼は1633年7月28日、西坂で殉教します。罪状書には、「この者は施しを集め、その金で殉教者の未亡人や孤児および宣教師を

右：花咲く西坂周辺
左：安土のセミナリオ跡



ミゼリコルディア本部跡



助けていた」と記され、殉教したのは、長崎にミゼリコルディアの組が創設されてからちょうど50年が経過した時でした。

ミゼリコルディアの組とゆかりの深いもう一人の殉教者はニコラオ福永ケイアン修道士です。彼は近江永原おつみに生まれ、安土のセミナリオで学び、1588年にイエズス会に入会し、天草のコレジヨで勉強したあと、修道士として宣教に打ち込みます。1614年まで博多の教会に留まり、そこからマカオに追放されますが、1619年に

西坂の殉教者（2人）長崎教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
ミカエル薬屋	1633.7.28	西坂	
ニコラオ福永ケイアン	1633.7.31	〃	63

秘かに日本に戻り、主に大村領で活動します。イエズス会の報告書には「日本の学問をよく修めている。日本語で巧みに説教する人」と記されています。今で言えばカテキスタとして教会に深く関わる修道士の姿です。仲間たちは彼を司祭に推薦しますが、日本に司教がいなくてもあり、その道は閉ざされてしまいます。

しかし、彼は修道士として堂々と説教し、信徒の共同体を導いていきます。1633年7月31日のイグナチオのお祝いの時に、西坂で穴吊りの刑で殉教します。殉教にあたり、役人たちが彼を呼び「何か後悔することはないか」と尋ねると、彼は「ユーモアを込めながら一つあります。それは將軍様をはじめ、すべての日本人をキリスト信者に導くことができなかつたこと」と答えています。